
緑色《りょくしょく》キャベツの逆襲

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緑色キャベツの逆襲

【Z-コード】

N5187A

【作者名】

七浦彩

【あらすじ】

風邪をひいてしまった佐緒里は妹の香代を看病のために呼び出す。

「う、いーっす。快調？」

緑色のキャベツを片手に、香代がドアを蹴り上げて入ってきた。べしんばたんといつ大きな音が、ぐあんぐあんと頭を内部から揺すり上げる。

「快調じゃないから呼んだんでしょうが……」

掠れた声がわたしの喉から漏れた。本日の体温、三十九度六分。咳は止まらない、頭は痛い、寒氣はする、食べものの味がわからない。

完璧な風邪だ。

梅雨がいつまでたつてもあけないもんだから、傘なんていらないだろうとタ力を括つてたから、数年ぶりと言われる豪雨をまともに全身で受けた。しかもその日は仕事仲間と飲んだ後だったから、べろべろに酔つてたから、アパートに帰つてくるのにいつもより時間がかかつた。

そりやあ風邪菌もこのチャンスを逃す手はないってもんでしょう。という訳で、昨日からわたしは寝込んだままとなつてている。何か栄養を、とは思うのだが、動くこともままならず、料理なんて出来る状態じゃないから、風邪を悪化させるばかりだつた。

なので、上京したばかりの妹の香代を呼んだ。なかなかに大ざっぱな子だから一抹の不安はあったが、わざわざ田舎から母を呼び出すよりは近くの人間に、と思うのが人情つてもんだろう。仕事仲間につつしちゃ悪いし。

さつそく香代はものすゞく鮮やかな色のキャベツを取り出すと、まな板に置いた。まさかとは思つけれど、あの子、もしかして。

「香代ちゃん」

「んー？ なあに佐緒里ちゃんさおづり」

「献立、なに？」

「スタミナもりもり野菜炒め」

わたしの頭の中で、油っぽく炒められたキャベツと豚肉とあと色々な具が踊った。

「……患者はおかゆを欲していますが……」

「んー、おかゆ……おナベ焦げるから後始末嫌なんだよね」

「野菜炒めでいいです」

わたしはなぜおかゆで鍋が焦げるのか、という疑問を解説するのをやめにして、香代が操る包丁の音に耳を傾けたことにした。

人がいる、という安心からだろうか、心も症状も少し穏やかになつた気がした。台所で悪戦苦闘しているらしい妹の背を見て、わたしはちょっと笑つた。

冷却シートがだいぶ薄くなつて、熱冷ましの効力が無くなつてきた。わたしは新しいのを額に貼つて、目を閉じた。ひやりとした感触が心地いい。

そういえば昔は逆だつたよな。わたしは包丁の音を聞きながら思い出していた。

わたしはなぜか風邪一つしない元気な子供で、今まで医者に行つた時といえば、遊びすぎて足の骨を折つたとか好奇心で触つた草にかぶれたとか、そんな理由でだつた。

姉がそんなどいうのに香代は本当に体の弱い子で、すぐ咳き込んでり家族が全員ピンピンしてゐるなか一人だけインフルエンザをしよつて帰つてきたりしていた。

熱を出して布団に寝たつきりになつてゐる妹に、わたしは本を読んであげたり、水枕の水をかえてあげたりした。妹はそのたびに、ありがとうさおりちゃん、と言って鼻水をたらしながら笑つた。

自分が眠つてゐるあいだ、わたしが何をしていたかも知らずに。

香代は、大人になつたら大ざつぱで適当な性格を發揮し始めたが、子供の頃は、そりやあもう絵に描いたような『良い子』だつた。ばたばた暴れまくるわたしを反面教師にしていたのかもしれない。そこそこはわからない。

取つてくるテストの点数は百点以外の方が少なくて、お客様にはにこにこと礼儀正しく挨拶をする。元気な割に人見知りする長女の代わりに。大人しくて本さえ与えておけば上機嫌でいる。母親の手伝いを率先してやる。欲しいおもちゃも我慢する。だだはこねない。完璧だ。理想の子供だ。

そんな妹を母親も父親も親戚も好ましく思い、可愛がるのは、ごく自然なことだと思う。けれどわたしはそれが気に食わなかつた。かといって妹のように振舞えるほどわたしは器用ではなくて、わたしはますますひねくれて、その分の愛情は妹に注がれた。悪循環だつた。

その上妹は体が弱かつたから、両親が妹にかかりきりになるといふことも多かつた。たかが風邪一つで両親の関心と愛情とを独り占めにできる妹が、うらやましくて、妬ましくて。

わたしは、妹が安心しきつて寝てている間に、何度もその真つ赤になつた頬をつねつた。頬だけじゃない。汗ばんだ腕や足も。わたしは妹の体に赤い跡がついていくのを、満足しながら眺めていた。しかもつねり方にも工夫をこらし、母が妹の汗を拭つてやるときや着替えをさせてやるころにはその跡が消えるくらいの力でつねつていた。

最低な姉だと思つ。

あの頃のことを思うと、自己嫌悪で吐きそうになる。

幼かつた。そんな形でしかうつぶんを晴らすことを知らなかつた。何も知らない妹が懐いてくるのに、震えるほどの優越感を味わつた。ひどく醜い感情だつた。

だからこそ今、こうして妹と仲良くできることが、嬉しくもあり、また辛くもある。複雑な気持ちだつた。

「うあーい。お待たせ」

ふわりとしょっぱい匂いがして、キャベツ九対他の具材一という摩訶不思議な野菜炒めが運ばれてきた。わたしはその縁々『みどりみどり』した謎の料理を凝視した。

「香代ちゃん。これ野菜炒めじゃない。キャベツ炒め」

「佐緒里ちゃん、キャベツはれっきとした野菜だよ？ キャベツを差別しちゃいけないよ。あ、今ちょっと韻踏んだ。ぶふつ」

自分で自分の言葉にウケている香代を無視して、わたしはてらてら光るキャベツを口に運んだ。ショッピー。スタミナがつくビックリか残りの力も奪われそうな気がする。

「あーこれしょっぱいねー。でも風邪引きには水いっぱい飲ませろつて言うしちょうどいいか」

香代はじ無体なことを口走り始めた。わたしは関節がみしみし痛むのを我慢して、自分で台所にスポーツドリンクを取りに行つた。そうしたらそこはガーデニング王選手権が行われたのではと思つほど、緑色になつていた。散乱したキャベツその他の切れ端で、頭痛が増した。

「……香代ちゃん」

「ああ、そこ後で掃除するから。佐緒里ちゃんちつてまな板もフライパンもちつちやくて料理しづらいんだもん」

コソロ周辺にもキャベツが散乱している。流しには焦げたキャベツがへばりついたフライパンが放置されていた。

わたしは後悔の念に苛まれながら、ペットボトルのスポーツドリンクを一気に飲み干した。そして新しい大きな方のペットボトルを取り出し、氷を入れたコップを二つ、一緒に運んだ。

「あ、ありがと。しかしこれやばいね。海の水飲み干したらこんな感じかな」

「そんなの病人に食べさせないでよ」

「それもそうだ。手伝つよ」

わたしたちは苦しみつつもしょっぱいキャベツその他炒めを少しずつ減らしていった。おかげが減るよりスポーツドリンクが減る方が早かつた。

「そういうやせあ、佐緒里ちゃんいつもわたしの看病してくれたよね

出し抜けに香代がそんなことを口走った。わたしは少しうきうきしながら、平静を装つた。

「ああ、うん。そんなこともあつたね」

「もー苦しくてさー。熱ひどいし頭ガンガンだしさー、食えるものつてといえば味氣ないおかゆでさー。その上部屋にテレビなかつたら楽しみつつたら本しかなくてさ。つまんなかった。親はべたべたひつつにて監視されてるみたいだつたし。あたしづつと佐緒里ちゃんがうらやましかつたな」

わたしは思いもよらなかつた香代の言葉に、勢い余つてキヤベツを氣管の方に押しやつてしまつた。むせるわたしを咳で苦しんでると思つたか、香代は優しく背中を撫でてくれた。

「……そつだつたの？」

「うん。あーあとで、佐緒里ちゃん親戚来るといつとも逃げてたでしょ。だからあたしは逃げらんなくてさ、もーうるさいババアの相手さいつあく！ その上母さんも父さんもあたしにへんな期待かけてくるからやー。なんかプレッシャーでさ。いい子じやなきやいい子じやなきやつて思つて。……反抗期に反抗するの我慢する青春時代つてどつよ」

香代はどん、とコップを置いて笑つた。その拍子に、上京してから開けたというピアスホールにつけられた新しいピアスが、揺れた。

「という訳で、ちょっとびり仕返し」

わたしはなにがなんだかわからなくなつて、放心したまま、とりあえず苦笑した。

「キヤベツで？」

「キヤベツで」

わたしたちは顔を見合させて笑いあつた。お互い持つてた、無いものねだりの「ノンフレックス」。

「でも佐緒里ちゃんがいてくれたから、あたしどひにか暴れ出さずには済んだんだよ」

「それはよかつた」

ようやく庭になつたお皿を横田に、わたしは薬を飲んだ。充分唇を湿らせて、あのね、とずっと心の中に溜めていたものを香代に話した。ただし、つねつたことは内緒にして。それはわたしの心の中に、ずっとしまつておく。この痛みは、このわたしだけの痛みは、生涯わたしが背負つていいくべきものだから。香代に取つた醜い感情のはけ口の罠として。

だから、わたしは黙つておくことにした。

何よりも、香代を無くしたくないから。

するいと思う。けれど、きっと黙つていた方がお互いのためだろう。香代だって黙つてることはあると思う。わたしのせいだ我慢したことは、まだたくさんあると思う。でも香代はわたしに懐いてくれている。わたしも香代のことが好きだ。それでいいんだ。姉妹つてのは、そんな感じでいいんだ。

熱を計つたら少し下がつっていた。

散乱したキャベツを片付ける香代の背中に、窓からじき零れた太陽の日差しが当たつっていた。

ああ、もうすぐ、夏が来るな。

わたしは安らかな気持ちで、田を開じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5187a/>

緑色《りょくしょく》キャベツの逆襲

2010年10月8日15時52分発行